

シンポジウム「科挙からみた東アジア—科挙社会と科挙文化」

企画趣旨

近藤一成

二〇〇六年度の中国社会文化学会大会シンポジウムは、七月九日に標記の課題で開催された。当日、ヒルデ・デ・ヴィールドト氏「南宋科挙の学術史」、飯山知保氏「金元代における外来民族の儒学習得とその契機」、宮嶋博史氏「朝鮮時代の科挙」、鶴成久章氏「明代の科挙制度と朱子学」の四本の報告があり、それぞれに対し高津孝、ベンジャミン・エルマン、森田憲司、大木康の各氏からコメントがなされた。本シンポジウムについては、事前に次のような開催趣旨を案内している。

企画趣旨

「昨年（二〇〇五年）は、中国の科挙制度廃止から百年、中国では激化の一途をたどる大学入試験との関連で科挙は再び注目されている。翻つて日本の学界の科挙研究をみると、以前のように活発な議論が展開する状況にあるとは、恐らくいえない。それは、制度史研究が中国史学の主要分野の一つであった時期が過ぎ、政治史や社会史に研究者の関心が向いていった研究潮流の変化と連動する。しかし、政治史や社会史、さらには文化史の分野において、科挙が占める役割について残された課題が多い。

科挙官僚の背後には、数千倍の落第者が存在する。科挙は、

大量の落第者を再生産するシステムであった。能力有りと自信する「人材」が採用されず、逆恨みした「人材」が反王朝勢力を指導して反乱に走ることはよく指摘される。しかしそれは例外中の例外であり、大多数は落第に落第を重ね、精神は屈折、人格がいびつになると受験し続けて生涯を終えた。それにもかかわらず又はそれ故、王朝は平均すれば安定支配を続けたのである。こうした圧倒的多数の落第者に自分の生き方を納得させる社会、これを科挙社会と呼ぶとすると、王朝の安定支配を可能にする社会の再生産システムは、その中に科挙制度を組み込む科挙社会ということになる。その科挙社会の担い手たちが、また独自の文化の担い手であつたことは論ずるまでもない。問題はその内実である。

宋において文化の担い手の中心階層は士大夫官僚であった。それが元以降どのように変わって行くのか。その推移とそれがもつ通史的・歴史的意義も未解明である。」

企画原案では、これに続けて「題目に『東アジア』を掲げながら、報告から洩れ、落ちた地域・時代は多い。不足はフロアとの討論で補いたい」との一文が挿入されていたように、当初はベトナムや、何より科挙を導入しなかつた日本の報告

を入れることで、科挙を通した東アジア地域社会の比較研究を考えていたのだが、当日の時間の制約とこちらの企画能力不足によって今回は断念せざるを得なかつた。しかし、金朝と朝鮮王朝の報告が入ることでその意図は多少とも実現されたと思う。いずれにしても貴重な四つの報告とコメントを受け、今後は、私自身のなかでそれらの成果を熟成させ、この課題へ再度挑戦できる機会の到来に備えたいと思う。

今回の企画については、もう一つ述べおきたい背景がある。それはこのシンポジウムが文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」（通称にんぶる 領域代表小島義）の協力を掲げたことである。その計画研究のなかで、とくに「中国科挙制度からみた寧波士人社会の形成と展開」という研究課題を挙げる科挙班のメンバーは如何かの形で全員が今回のシンポジウムに参加した。課題とシンポジウムの題目と同じではないが、当然、内容上重要な部分もある。その申請調書に記した研究計画は以下の通りで、現在これに沿つて共同研究を進めているところである。いささか長くなるが引用する。

「寧波地域を主な対象として、時代を宋・元・明に限定し、科挙をキーワードに地域における士人社会の構造の通時的解明を主目的とする。

一般論としていえば、中國史を中心 (core)・周辺 (periphery) 理論を用いて理解する本計画の手法には一定の意義があり、その観点から寧波は眞に興味深い位置にあるといえる。例えば政治の中心、華北からみれば寧波は明らかに周辺である。

しかし南宋になると一転、杭州臨安との距離の近さ以上に、南宋政権中枢の人材供給地として独自の地位を占めるようになり、もはや周辺とは到底いえなくなる。さらに本特定領域研究の視野、すなわち環東シナ海文化圏にまで枠組みを広げるなら、寧波は海域と陸域を結ぶ結節点であり、中心でも周辺でもない中継拠点としての特質こそ重要となる。このよう寧波の重層的な人文地理上の位置づけは、本領域内の他の諸研究と彼我参照することによってのみ実現するのであり、本研究は、そのなかで地域文化の主要な担い手である士人層に焦点を絞ることで、寧波の文化地理学的特質の究明をめざす。

中国のある特定の地域を、科挙制度を軸に社会文化史の観点から通時的に考察する試みは、少なくとも従来の日本においては皆無である。その最大の理由は、元朝期の研究蓄積が殆ど無いことにあつた。近年、13、14世紀の元代は活発な研究活動を展開する時代として注目を浴びている。しかしこれも実態はモンゴル帝国史研究が主流であり、いわゆる元朝史に限ると研究者層は厚くない。（中略）

士人層は、北宋の科挙制度確立にともない出現した科挙受験者と受験希望者ないし受験可能者からなり、郷居官人や寄居官人を含めてもよく、地域社会の上層に位置する読書人階層と仮に定義しておく。また宋代における士人層の出現の意義を、本研究は以下のよう理解する。中國社会を古代から近代まで一貫して貫く原理は、支配と被支配に換言可能な「十一庶」の觀念的・実態的区分である。宋代になるとそれ

まで固定的実態的区分の傾向が強かつた「士—庶」の別が、科挙によつて流動化する。これは「近世」中國社会にとり決定的画期となる。「士—庶」の別が身分制であれば、やがて制度内部の矛盾は臨界点で枠組みそのものを吹き飛ばすエネルギーを蓄積する。しかし、科挙はそのエネルギーを流動化現象に誘導し、「士—庶」の枠そのものは存続し続けた。その結果、「士—庶」社会は熟成し、爛熟し、腐敗する。魯迅の描く孔乙己・阿Qこそ、士・庶それが清末に辿りついだ成れの果ての姿である。さらに庶の深層に長年鬱積されてきた、士へのルサンチマンぬきに毛沢東の革命路線を理解することは困難であろう。こうして宋代に出現した「士—庶」社会は、千年間生きのび中国近現代をも強く規定することになつたのである。

士人層とは、士大夫と庶人の間に位置する、流動化した「士—庶」社会の中間層である。宋代以降の中国地域社会の階層秩序は、科挙という国制を媒介に形成され展開した。従つて本研究の通時的考察とは、起・「近世」科挙制度の確立と士人社会の形成（北宋）、承・科挙制度の定着と士人社会の熟成（南宋）、転・科挙制度の不存在し實質的不在と士人社会の対応（元）、結・科挙制度の改変・復活と士人社会の完成・爛熟（明）という、中央の施策と地方の反応といふ見通しのなかでなされる。以上の計画研究は、同様な手法により中国のどの地域を対象にすることも可能だといえる。その意味では事例研究の一つである。しかし、寧紹地区に関しては、斯波義信氏の地域開発史の観点からの重厚な社会経

濟史研究の蓄積があり、既に基礎的な研究基盤が整えられている。また海外とりわけ日本、朝鮮への文化発信の拠点として位置づける寧紹の研究にとり、士人社会の構造の通時的変遷を追う作業は議論の前提となる。これが単なる事例研究以上の意義を本研究に与えるといえよう。

一口に中国の科挙社会・科挙文化といつても、地域差を無視してはその豊富な内容を十分掬い取ることはできない。地域の最小単位の変遷を検討対象にするにんぶろ科挙班と、地域の最大単位である東アジアを検討対象とした今回のシンポジウムとは、士人社会に焦点を絞るか科挙制度全体に広げるかの違いはあるが、科挙社会・科挙文化研究の空間軸の両端に位置するといつてよいであろう。こうした枠組みのなかで今回のシンポジウムを企画したことをつけ加えておきたい。

二〇〇五年九月に廈門大学で開催された科挙廢止百年記念国際学会「科挙制の終結と科挙学的興起」には一二五篇の論考が報告され、そのなかから六〇数篇を掲載した報告書も刊行されている（劉海峰主編、華中師範大学出版社、二〇〇六年一〇月）。報告の内容は科挙制度の起源から現在の中国の大學生試験問題まで、時代も地域もさまざまである。科挙研究の課題は、まだまだ山積しているといつてよいであろう。